

# 街頭の公共圏とその美学

## — スタイルとしてのSEALDs 2015年夏 —

城 野 充

The Public Sphere in the Street and the Aesthetic Style

Mitsuru JOHNNO

### 要 約

ここで描こうとしたのは、2011年から2015年のいわゆる街頭の公共圏、とくに2015年夏に顕著なカタチとなってそこで出現した「融合的なわれわれ」への欲動のさまである。この欲動のさまは、「新たな魔法がけ」によって人々が民主主義の原点を浮かび上がらせようとしたことを示すものであったといえるだろうし、また「民主主義」はこうした「新たな魔法がけ」がつねに必要なということを示すものであったともいえる。いずれにせよ、「共に感じる」ことがその中心にあったのである。

そして、2015年夏においてこの「共に感じる」媒体となったのが、SEALDsというスタイルだった。

キーワード：「融合的なわれわれ」、「触覚的隣接関係」、「新たな魔法がけ」、SEALDs

## はじめに

「2015年9月現在、いまやデモなんてものは珍しいものではありません。路上に出た人々が、この社会の空気を変えていったのです。デモや、至るところで行われた集会こそが「不斷の努力」です。そうした行動の積み重ねが、基本的人権の尊重、平和主義、国民主権といった、この国の理念を体現するものだと私は信じています」。安保関連法案に関しての参議院特別委員会公聴会（2015年9月15日）でSEALDsの奥田愛基は国会議員たちを前にこう陳述している（SEALDs 2015：124）。

奥田が言うように、2015年の初夏から秋にかけて、東京にとどまらず全国各地で多くの人々が街頭に出て安保関連法案に反対する声をあげた。こうした一連の行動の象徴的なこととして、国会周辺の道路や歩道が10万人を超えたとも言われる人たちで埋め尽くされ「国会前広場」と化した8月30日の抗議行動を挙げることができよう。

劇作家・演出家の宮沢章夫は『朝日新聞』の書評欄（2016年8月14日、朝刊）で、国会前に「足を運ぶ」といった表現で、「自分の都合に合わせて、自分の都合で帰る」ことのできる、そのような気分をこの反対行動にみとめ、「その気分を作ったのがSEALDsではなかったか」と結んでいる。

本稿のねらいは、「足を運ぶ」感覚で人々がデモをする、路上に出るようになったという、その「気分」をつくったSEALDsのスタイルを、「美的なあり方の様式」（M・マフェゾリ）として考察し、それがひとつの触媒となってもたらされた2015年反安保法制のうねりを「近代民主主義」の文脈ではなく、「触覚的隣接関係」（マフェゾリ）に基づいた「共感による共同体」への回帰現象としてとらえるようにするものである。

## 新しいスタイルとしての安保法案に反対する抗議運動

「若者」「学生」「SEALDs」等の見出しで、1960年の安保反対運動、また1960年代末の学生、反戦運動の再来であるかのような論調でマスコミによって語られた2015年の安保法制反対運動だが、歴史社会学者の小熊英二は、「2015年は2011年の延長であって、1960年代の再来ではない。中心的な担い手の性格も、人の集まり方の形態も、まったく違う」とし、その特徴面での1960年代の運動との相違、2011年に始まった運動のスタイルの連続性を指摘している（小熊 2016：34）。彼によれば、2011年を起点とする今回の運動は、労働組合や大学自治会といった社会集団を基礎にしておらず、あらゆる社会層の人々が参加していることが特徴であるという（同上：31）。また、小熊は別のところで、「2015年8月30日の国会前の12万人の集会は、突然におこったのではなく、2011年以降の長期的文脈で成立したものであった」として、起点としての2011年の意義を強調している。

では、日本の社会運動において2011年とはどのような年であったのだろうか。この年の3月11日、宮城県沖で発生したマグニチュード9.0という規模の地震による大津波が東北地方沿岸部を襲い、人類史上最悪の東京電力福島原発事故を引き起こした。この原発事故以降、2012年にかけて反原発デモ・集会が幾度となく行われるようになっていくのであるが、事故直後の4月10日に行われた東京・高円寺のデモは、小熊の言う「2011年以降の長期的文脈」において特筆すべきものであった。

「素人の乱」（高円寺のリサイクル・ショップ「素人の乱」。店主は松本哉）によって呼びかけられたこの「4・10 原発やめろデモ!!!!!!」では、「どこの団体でも組織でもない、いたとしても勝手にきただけ」の1万5000人が「もう主催者もヘッタクレも関係なく」、チンドン屋部隊から、ダンサー集団、パンクス、ドラム隊、DJ、ラッパー、東電や政府に対して怒りまくってまじめに叫んでいる人たち、家族でピクニック風の人たち、さらには外国人に至るまで、「本当に思い思いの意思表示の仕方」、「原発やめろ」の声をあげて路上に繰り出したのである<sup>1</sup>。ネット時代の新たな群衆論を研究する伊藤昌亮はこの日のデモの様子を、「こうなるともうこれが本当にデモなのか、それとも新手のお祭り騒ぎなのかわからなくなってくる」と表現している（伊藤 2012：24）。

しかし、原発事故後に初めて展開された、大規模で、「ど派手」なこの高円寺のデモについて、ほとんどのマス・メディアは報じてはいなかった<sup>2</sup>。けっして、いわゆる「ニュース・バリュー」がなかった訳ではないだろう。にもかかわらず、なぜマス・メディアはこれを取り上げなかったのでしょうか。このことについて伊藤は、それを報道する側にとって「それはデモなのかお祭りなのか、真剣な抗議行動なのかそれともお気楽なオフ会、あるいは冗談半分のイベントなのか」よくわからなかった、つまりその取扱いがわからなかったからだろうと、推論している（同上：26）。呼びかけメンバーの中心人物である松本哉をして「主催者もヘッタクレもへったくれも関係なく」、「勝手にきただけ」と言わしめた1万5000人によって繰り広げられる、怒りの抗議デモなのかお祭り騒ぎなのか、いわば「わけのわからない」「デモのようなもの」を取り扱う「フレーム」をメディア側は、この段階では持ち合わせていなかったのである。主催者と動員された人、そのそれぞれが明確（労働組合や政党などによって組織化されているという点）で、睨をけっしてシュプレヒコールをあげ、最後には、一方の手を腰にあてがい、もう一方は拳を斜め上に突き出して、「ガンバロー」で締めくくられるといったスタイルこそが、メディア側に用意されている抗議デモ・集会の「フレーム」なのだろう。

このような意味で、4・10高円寺デモは明らかに従来の「反原発」抗議行動に対する報道側の「フレーム」には収まりきらないものであった。「反原発＝真面目」といった旧来からの図式を超えたものとして、新しいスタイルでもって、震災後の日本を覆っていた派手なことに対する自粛ムードを切り裂くかのようにこのデモは現れたのだ。

また、やはり「素人の乱」が呼びかけ、さまざまな市民運動団体も加わっておよそ2万人が参

加したとされる6月11日の新宿デモに関して、政治学者の五野井郁夫は新宿アルタ前広場に集まった人々の光景（「6・11新宿 原発やめろデモ!!!!」）を、「非暴力」「祝祭性」といった点で、「40年以上前の物騒なイメージの出来事」とは決定的に違ってたと書いている。五野井はこの新宿アルタ前に集まった反原発デモの雰囲気、「戦後史における暴力の連鎖との決別」をみたのである（五野井 2012：8）。ここで五野井の言うところのデモに対する「40年以上前の物騒なイメージ」は、「投石、ゲバ棒の暴力」「過激派」「騒乱」「逮捕」などで構成される、いわゆる「デモは怖い」「学生運動は怖い」といった、とりわけ「学園紛争」「反戦運動」、そして「連合赤軍事件」についてのマス・メディアの一連の報道によってできあがり、結果人々の間に広く共有されるにこととなったものなのであるが<sup>3</sup>、このような「デモ=怖い」といったイメージを「カーニバルのような祝祭的なもの」へとその転換を準備したのが1990年代から2000年代にかけての「路上を取り戻す」さまざまな試みであり、そしてこのことをより確かなものとしたのが、福島原発事故以後の「反原発」デモであった（五野井：202）<sup>4</sup>。

また、6月11日の新宿の「反原発」デモは、「お祭り」「祝祭」型のデモと、「真面目」な「市民運動」型のデモが合流・融合したことで、それまで「反原発=真面目」という「報道フレーム」しか持ち合わせていなかったメディアにこの種のデモを取り上げさせることとなる契機となった（伊藤：26-27）。この意義は決して小さくはない。そして、「お祭り」型と「市民運動型」の合流、ときには融合が、2015年のSEALDsの源流となっていくことになる。これまで多くの者が指摘しているように、SEALDsは突然に2015年の「反安保」の時空に出現したのではないというのは、まさにこの意味においてである。

ここでもうひとつ触れておくべきは、小熊が指摘するところの「広場」に関わることだろう。東京には他国にあるような（カイロのタハリール広場、ニューヨークならズコッティ広場）抗議の拠点となるような「場所」=「広場」がなかったがゆえに、2011年から2012年の東京での反原発運動は、その「広場」を求める模索としてあった。このように彼は述べている（小熊 2016：33）。1989年の東欧革命の際、例えば、チェコはプラハのヴァーツラフ広場に民主化を求める多くの市民が集まった光景を、さらには、北京の天安門広場で展開された民主化要求のための占拠とそれに対する当局による弾圧の模様をわれわれはテレビ映像で目にしたわけであるが、広場は世界の都市において、支配者の代表具現の空間であると同時に、市民の声を結集する空間、「われわれ」を確認する空間でもあった。公園はあっても、そのような「器=メディア」としての広場は東京にはなかったのである。ところが、2012年3月から開始された毎週金曜日の官邸前の「反原連」による抗議行動は、やがて予想外の広がりを見せていくなかで、官邸前・国会前に「広場」を出現させていくことになる（同上）。

そして、この過程において新たに「発明」されたのが「スタンディング」というスタイルであった。「スタンディング」は、「街頭で意志をアピールしながら練り歩く従来のデモとは違い、一カ所でスタンディングしながら、抗議対象に直接言葉を投げかける、というスタイル」をもつ

もので、「従来のデモが出来ない官公庁街でどうにか示威行動をするために」と考え出されたものだという（吉田 2016：96）。官庁街でのデモ規制という制約が、歩道で「スタンディング」をするといったかたちの創意工夫を生み出した。結果、そこに人がどんどんと溜め込まれることで、歩道と車道の境界線の決壊をもたらし、車道に溢れだした数万の人々で官邸前・国会前が「広場」化する、そのような光景を生み出していったのである。ここで「発明」された「スタンディング」は、2015年8月の「国会前広場」へとつながっていく。

このように、原発事故の一月後にリサイクル・ショップの友人関係を軸にした小集団によって呼びかけられた高円寺の「お祭りのようなデモ」は、それまでのデモの構図を大きく変えるものとなり、そのことによって人々にデモへのハードルを下げたという意味でも、日本のデモの歴史において特筆されよう。これとも関連することであるが、人々に「スタイルによる選択性」を与えたという点も見落とすべきではない。これ以降、デモに参加しようとする人は、「自分にあったスタイルのデモ」を選択し、そこで身体感覚として「われわれ」をつくっていくこととなる。ここに、上野千鶴子が「チューニング・コミュニタス」（上野 1984：78）と名づけた共同性の時空を見出すことができるのである。

この「チューニング」にとって重要な役割を果たしたのが、ツイッターなどのSNSである。従来の組織的動員の回路から「自由」となっている人々はインターネットを介して、まずは「自分の波長に合った共同価値」（上野千鶴子）を情報のレベルで選択し、そのうえでそれぞれが個人としてデモに参加したといえるのではないだろうか。2011年以降の社会運動は旧来の動員型ではないという点で特徴的であるとされるが、そうした変化をもたらした要因のひとつが、「ネット」を介した「チューニング」、すなわち「検索」と「選択」であった。

以下に取り上げる2015年のSEALDsも、メンバーそれぞれがこの「ネットでの見え方」に徹底的にこだわり、彼らにとっての日常のメディアであるSNSを活用することによって「それぞれの日常のなかでのデモ、民主主義への想い」を「メディア・イベント化された日常」の一光景としてネット上に提示していったのである。そして、街頭でのかれらの運動スタイルとこのネット上での提示スタイルを社会運動の「新しいかたち」として取り上げたのがマス・メディアといえるだろう。それによってSEALDsの存在が広く知れ渡っていくことになるのであるが、かれらの運動スタイルが「新しいかたちをもっている」とのとらえ方をマス・メディアに獲得させたのが、2011年4月以降の社会運動のスタイルに他ならない。

## SEALDsというスタイル

2015年に全国各地で展開された安保関連法案への大規模な反対運動はその年の5月に結成されたSEALDs（Students Emergency Action for Liberal Democracy-s 自由と民主主義のための学生緊急行動）の存在を抜きにしては語ることはできない。では、このSEALDsが安保反対運動で

果たした役割とは一体何であったらだろうか。

小熊は2015年におけるSEALDsの意義について、2015年は2011年と根本的には変化はなかったとしたうえで、「もっとも大きな変化は、SEALDsがマスメディアから注目を集め、こうした運動が日本に存在することが周知されたことだろう」（小熊 2016：229）と述べている。

また、作家の高橋源一郎は『朝日新聞』（2016年8月27日、朝刊）において、SEALDsがやった重要なこととして、特別なものとなってしまうていたデモを再び当たり前にしたことを挙げ、それは「奪われていたもの」を取り戻す試みであったとする。

さらに、3・11以後の社会運動を「路上」「ネット」の交錯するところと位置づける社会情報論の研究者の田村貴紀と田村大有によれば、SEALDsの働きは「デモは高齢者のするもの」という社会通念を破ったことと全世代の社会運動を活性化させる触媒となったことであるという（田村貴・大 2016：163,166）。SEALDsが果たした触媒作用については、小熊も「SEALDsは一種の触媒みたいなもので、プロセスを早める機能はあるけれども、直接的な動員を起こしているわけじゃない」と言及している（小熊 2016：55）。

そして、本稿の「はじめに」でも触れたように、宮沢章夫はかつての動員デモとは異なり、自分の都合に合わせて国会に「足を運ぶ」という気分をSEALDsは作った、と「気分」という言葉をつかってその意義を表現している。

ここに取り上げたそれぞれからいえることは、2011年以降の流れのなかから誕生したSEALDsの活動は、そのスタイル、とりわけ提示スタイルにおいてマス・メディアに注目されることとなり、そのことが人々の目を反安保の社会運動に向けさせていくことになる。そして、それによって2011年以降の文脈で培われていた運動（かつての怖いイメージのデモ・集会から祝祭的なそれへと変貌した運動）がさらに活性化し、さしたる「覚悟」なしに、人々が気軽に路上に出て声をあげることに大いに貢献したということである。

では、SEALDsの提示スタイルとはどのような特徴をもっていたのであろうか。それは、「路上での見え方」、そして「ネットでの見え方」「マス・メディアでの見え方」へのこだわりにある。メンバーの加藤友志は、SASPL（特定秘密保護法に反対する学生有志の会）とSEALDsのデモのコンセプトを「車道と歩道をつなげる」とし、「歩道からの見え方を想像、メディアへの映り方を想定してデモ全体をデザイン」していたと語っている（SEALDs 2015：61）。この加藤の発言にみられるのは、「メディア・イベント」としてデモをとらえるというその感性である。メディアの存在を前提としてデモをデザインするという発想は、日常のなかにPV（プロモーションビデオ）がある世代ならではのものといえるだろう。そして、「見え方」「映り方」の根底にあるもの、それは「かっこよさ」（彼らにとって、この反対は「ダサイ」である）なのであった。「いかにかっこよく見えているか」、「いかにかっこよく映っているか」。この「かっこよさ」へのこだわりはSEALDsの非常に大きな特徴である。このあたりをメンバーたちの座談会で確認することにしよう。

(本間) デモのためにああいうCM映像があるのって、新しすぎだもんね。それが2014年2月1日の最初のSASPLのデモね。

(牛田) 最初のデモ、やってみてけっこう楽しかったよね。

(本間) 楽しかった。

(奥田) 楽しかったっていうか、思った以上のことだったんだよね。

(牛田) 何かが起こっているってところはあった。PVみたいだった。

(本間) そうそう、PVみたいな感じ。(略)

(奥田) どっきょ(山本雅昭)が最初のころ「世界でいちばんかっこいいデモをしようぜ」とか言ってたんだよね。

(本間) 「PVみたいなことしようぜ」って言ってた。楽しかった。

(奥田) 頭悪いよね、ほんと(笑)。だけど、2月が終わった後、(やりたいことの)40点くらいだって言って。「愛基さあ、俺らいままでと違う方法で言いたいって言ってたけど、これってデモじゃん」って言われて、「デモだよ」って(笑)。「デモにきまってんだろ」みたいな。

(牛田) デモ申請したしね(笑)。要するに、デモじゃない何かがやりたいと。

(奥田) そう、デモじゃない何かがやりたい。なんかもっとかっこいいことしたいって。(略)

(同上：37,38)

このように、SEALDsの前身であるSASPLの立ち上げの際、彼らがいかに「かっこいい」にこだわっていたのかがよくわかる。そしてこの「かっこよく」デザインされたデモは、それによってマス・メディアに「大学生」「若者」、「おしゃれ」や「クール」といった言葉とともに新たな報道の「フレーム」を提供していくことになる。

例えば、東京新聞(2014年10月26日朝刊)は、2014年10月25日に渋谷で行われたSASPLの特定秘密保護法案反対デモの様子を、「大学生 @渋谷 おしゃれデモ」「秘密法反対…でもダサイのイヤ」との見出しで報じている。そこでは、ヒップホップ調の音楽に乗せてラップ調のコールをするデモのスタイル、「クラブ好きのただの大学生」という参加者の大きな丸いイヤリングとサングラス、そして丈の短いTシャツといったファッションスタイル、フライヤーのデザインに言及がなされ、「スタイルへのこだわりは同世代にデモを敬遠させないためだ」と、このデモのもっているスタイルへのこだわりの意味を伝えている。

このSASPLの「スタイル戦略」が報道メディア側に与えた「フレーム」は、2015年夏のSEALDsに関する報道へと受け継がれていく。朝日新聞(2015年8月24日朝刊)は、その前日のデモを、「青山」「表参道」「お気に入り青いワンピース」「SNSに載せるデモの写真をスマホで何度も撮った」との語句や文章、写真によって、先頭で横断幕をもつひとりの女子学生を浮かび上がらせる。そして8月31日の朝刊では、反安保運動で注目を集めたのがSEALDsとしたうえで、「SNSでつながった若者の「かっこいい運動」はメディアで取り上げられ、回数を重ねるご

とに参加者を増やした」と、2015年反安保のうねりのなかでのSEALDsはそのスタイルとの関連において位置づけがなされている。

上の「スタイルへのこだわりは同世代にデモを敬遠させないため」ということからわかるように、彼らはスタイルのもつ凝集力にきわめて自覚的である。このスタイルの本質的特徴は、M・マフェゾリが言うように、「現代社会における美的（美学）なあり方の様式」であり、ここでの美的（美学）とは、「共同で感じ取り、経験する様式としての美学」であるということだ（マフェゾリ 1993/1995：49）。SEALDsのメンバーたちの「かっこいい」への関心は、まさにこの美学にかかわるものであり、実際のところ彼らにとって「かっこいいスタイル」は共通の言語になっていることはすでにみてきたところである。いまやSEALDsを語るとき、必ず取り上げられるとあってよい「コール&レスポンス」、また、オキュパイストリートから引っ張ってきたという「Tell me what democracy looks like」や「I say ○○ You say ○○」（SEALDs 2015：39）も、この「かっこいいスタイル」の文脈に位置づけられるのだろう。

もちろん、「かっこいいスタイル」はあくまでもその評価は他者によってなされるものである。マフェゾリは「スタイルとは、何よりも他者の眼差しや言葉によって、またその中でのみ存在する」と述べているが（マフェゾリ 同上：33）、この意味で、先のSEALDsメンバーの加藤の発言で注目すべきは、彼がこだわっているのは「見せ方」ではなく、あくまでも「見え方」であるという点である。そこにあるのは独りよがりではなく、「他者の眼差しや言葉」への想像力といった点である。

そしてこのことは、彼らの「話し方」にもつながっている。彼らの口から発せられる言葉は、他者にどのように「聞かれているか」を意識したものであった。このあたりのことを、メンバーの大野至は「国会前だと周りが皆味方なので、どんな日常とかけ離れた言葉を使っても、ある程度受け入れてもらえる。でも、街を通り過ぎる人を相手にしたとき、そんなものは一切通用しなくなる」と言う（SEALDs 2016：110）。

こうした他者の眼差しや言葉のなかにのみ存在するスタイルのこの社会性を意識したSASPLとそれに続くSEALDsメンバーらの「スタイルへの関心」は、けっして軽視されるべきものではない。「かっこいいデモ」「おしゃれなデモ」のかたちは、「共に感じる」にあたっての「容れもの」となり、その社会性ゆえに、触媒となって反安保の流れを活性化させていったのである。もしスタイルのもつ社会性に鈍感であったなら彼らの「かっこいい」は、日常を生きる同世代の若者たちにとって「標識」とはなり得なかったであろう。

## 反安保の時空—2015年

2015年の夏は「反安保の季節」として人々に長く記憶されていくであろう。そして、この2015年安保を報じるメディアの真ん中には、つねに「かっこいい」SEALDsがいた。いつしか彼らの

まわりには、学者や文化人とよばれる人たちも立っていた。学者や文化人たちをその場に立たせたのもSEALDsという「容れもの」があってこそのことだと言えるだろう。「器になるみたいなことがやりたかったんです。」—メンバーの本間信和はこのように言う（SEALDs 2016：54）。器になるためにSEALDsはスタイルにこだわったのである。それは換言すれば、共感の媒体としてのSEALDsということだ。

SEALDsはその社会性、スタイルによって2015年の夏、反安保の時空において人々の共通のシンボルとなっていく。いみじくも小熊は「SEALDsというシンボルのもとに、10万人が集まったのが実態」と、SEALDsが持つに至ったそのシンボル性に言及している（同上）。SEALDsが直接に10万人を動員したのではないとは、まさにこのことなのである。それはSEALDsというひとつのスタイルの感受性、すなわち考え方、行動の仕方、感じ方（例えば、メンバーたちが常に言うところの「個人」を起点にした発言や行動をモットーとするということ等）が2015年の夏において優位を占めていたということなのであろう。

SEALDsのスタイル、SEALDsというシンボルのもとに路上に繰り出した数千、ときに数万の人々によって繰り広げられた光景とはどのようなものであったのか。繰り返される「コール&レスポンス」、あるいはスマホをみながらのスピーチとそれに聞き入る人々。そこにあったのは、「共に感じる」という共同体験の光景である。現在もなおYoutubeで見ることのできる国会前の当時の様子からうかがうことのできることは、それは国会前が巨大な「感じる」空間になっていたということである。この「感じる」「共に感じる」は、2015年夏の語りにおいてあまり前景化されてはいないことではあるが、人々を街頭へと駆り立てたのは、SEALDsのスタイル、その感受性によって「共に感じる」関係、マフェゾリの言う「触覚的隣接関係」（マフェゾリ 1993/1995：135）への渴望なのではなかったか。そして、ここにおいて、まさにスタイルこそが人々を「触覚的隣接関係」へと誘うものであった。

2015年の夏に街頭で響き渡った「コール&レスポンス」の「民主主義ってなんだ」「これだ」について、メンバーの羽島涼は「この「これ」とはいったい何を指しているのだろうか。端的に解釈すればあの夜国会前に集まった群衆であり、そこにいた人々の肉体だろう。そして同時に「これ」は「民主主義ってなんだ」という問いかけそのものであるとも言える。他者に向けて開かれていることが民主主義なのだ。」と語っているが（SEALDs 2016：244）、このことは他者たちとの関係としての「触覚的隣接関係」に通じるものであろう。「個人を出発点とした」個々人は、この「共に感じる関係」、「触覚的隣接関係」に入ることで「融合的なわれわれ」となっていくのである。ともすればSEALDsの「個人を起点」とするその感受性は「近代民主主義」「個人主義」の文脈で語られがちであるが、上の羽島の語りからもわかるように、人々があの場で感じ取ったものは、この「融合的なわれわれ」ができあがっていくことの快感だといってもあながち間違っていないだろう。また、メンバーの牛田悦正は「僕らは国会前の抗議で民主主義を美的に演出しているんじゃないか。」と言う（高橋源一郎/SEALDs 2015：158）。それは、

共同で感じ、経験するという意味での美学なのであり、2015年夏の「民主主義の美的なあり方」、様式だといえる。

既出の小熊は「2011年以後」に著した『社会を変えるのは』のなかで、この時代における「デモの意味」について次のように述べている。長くなるが引用しておこう。

「デモの意味」については、私はこう考えます。まず参加者が楽しい。こういうことを考えているのは自分だけではない、という感覚もてる。ひさしぶりに顔見知りにも会うこともありますし、見知らぬ人に声をかけても共通の話題があります。これは一種の社交の場です。

(略) 数を集めるだけなら、投票でも世論調査でもネット署名でもできますが、人間が直接に社交することの意味は小さくありません。視覚、聴覚、嗅覚、触覚などの総合、さらに五感を超えた何かが伝わります。

デモや集会は、昔は数を誇示する手段でもありました。各種のメディアが発達した現代では、それだけなら別の方法もあります。しかし、具体的に人が集まることによってかもしだされる、五感がすべて複合した、あるいは五感をこえた「雰囲気盛り上がり」は、メディアでは代替できないものです。

盛りあがれば、「自己」を超えた「われわれ」が作られます。それができあがってくる感覚は楽しいものです。コンサートの一体感にも近いですが、平場の全員参加で作るところが違います。

参加者みんな生き生きとして、思わず参加したくなる「まつりごと」が、民主主義の原点です。自分たちが、自分個人を超えたものを「代表」していると思えるとき、それとつながっていると感じられるときは、人は生き生きとします。

(小熊 2012: 497,498)

彼のこのデモ論の基調には、「共に感じる」こととしての「美学」があることがわかる。他者との近接の「触覚的關係」にあって「共に感じる」ことで高揚状態がもたらされ、そのなかで「自己」を超えた「融合的なわれわれ」、「自己からの脱け出すこと」としてのエクスタシー *extatique* がつくられる。こうした交感による「まつりごと」のひとつの創出がデモなのである。そして、この「まつりごと」こそが民主主義の原点であるとする。「2011年以後の文脈」に立ちあった小熊は、肘と肘が絡み合う交感のなかでたちあがる「融合的なわれわれ」=「民衆力」に民主主義の原点をみたのであった。

そして、反安保の時空における「民主主義ってなんだ」「これだ」といった「コール&レスポンス」の繰り返しによって、人々はこの「民主主義の原点」を身体で感じ取ったのであり、そのとき「コール&レスポンス」は呪文となって人々に「共同体の記憶」を呼び覚ましていくことになる。人々は、この新たな魔法がけ *encantment* によって魅惑 *enchantment* されていたのであった。スピーチが終わり、「コール&レスポンス」が始まったときのその場の人々の興奮は、この「魔法がけ」による「自己からの脱出」=エクスタシーを求めるものなのだ。ここにおいて

われわれは2015年夏の街頭の公共圏に、「新たな魔法がけ」の一面をみることができるのである。

## おわりに

2011年以降のデモ等による街頭の公共圏の活性化に、この「新たな魔法がけ」の持つ危険な側面をみとめ、デモが礼賛される昨今の風潮に警鐘を打ち鳴らしたのが社会学者の佐藤卓巳である。ヒトラー・ナチスが登場したきたのがこの街頭公共性のなかからであることを明らかにした佐藤にすれば、そこでの「美学」、「美学」としての街頭公共性は極めて危険なものであった。ナチスも街頭での民主主義から生まれてきたのである。その点で彼が「デモの賞賛」に対して批判することは当然のことでもある（佐藤 2014：24-34）。

こうした佐藤の「デモ礼賛の風潮への批判」については、無責任とのそしりを免れないかもしれないが、この小論の扱うところではない。ここで描こうとしたのは、2011年から2015年のいわゆる街頭の公共圏のさま、とくに2015年夏に顕著なかたちとなってそこで出現した「融合的なわれわれ」への欲動のさまである。その様相は、「新たな魔法がけ」によって人々が民主主義の原点を浮かび上がらせようとしたことを示すものであったといえるだろうし、また「民主主義」はこうした「新たな魔法がけ」がつねに必要であるということを示すものであったともいえる。いずれにせよ、「共に感じる」ことがその中心にあったのである。

## 参考文献

- SEALDs編『SEALDs 民主主義ってこれだ！』大月書店、2015年  
SEALDs『民主主義は止まらない』河出書房新社、2016年  
TwitNoNukes編『デモいこ！一声をあげれば世界が変わる 街を歩けば社会が見える』河出書房新社、2011年  
伊藤昌亮『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ』筑摩選書、2012年  
上野千鶴子「祭りと共同体」（井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1978年）  
小熊英二『社会を変えるには』講談社現代新書、2012年  
小熊英二、ミサオ・レッドウルフ、奥田愛基「〈官邸前〉から〈国会前〉へ」（『現代思想』2016・3、青土社）  
小熊英二「波が寄せれば岩は沈む—福島原発事故後における社会運動の社会的分析」（『現代思想』2016・3、青土社）  
五野井郁夫『「デモ」とは何か—変貌する直接民主主義』NHK出版、2012年  
佐藤卓巳『災後のメディア空間—論壇と時評2012-2013』中央公論社、2014年  
城野充「拡張するトゥソフカのエートス—交感の媒体としてのテレビ、そしてエリツイン」（『追手門学院大学社会学部紀要』第10号、2016年）  
高橋源一郎『ぼくらの民主主義なんだぜ』朝日新書、2015年  
高橋源一郎/SEALDs『民主主義ってなんだ？』河出書房新社、2015年  
吉田理佐「あの日の後 路上にて」（『現代思想』2016・3、青土社）  
ミシェル・マフヱブリ（菊地昌実訳）『現代世界を読む—スタイルとイメージの時代』法政大学出版局、1995

ミシェル・マフェゾリ（古田幸男訳）『小集団の時代－大衆社会における個人主義の衰退』法政大学出版局、1997年  
毛利嘉孝『ストリーートの思想—転換期としての1990年代』NHKブックス、2009年

---

<sup>1</sup> この高円寺のデモについては、ウェブマガジン『松本哉ののびのび大作戦』を参照のこと。<http://www.magazine9.jp/matsumoto/110413/>

柄谷行人もまた、『朝日新聞』の書評欄（2016年9月18日）で、2015年の反安保法案デモは、2011年に「高揚した反原発デモの延長」としてあったのであり、「それに最も貢献したのは松本哉率いる「素人の乱」であった」と、松本の企てを高く評価している。

<sup>2</sup> 五野井郁夫によれば、NHKが夕方の全国版ニュースで取り上げたのは、高円寺のデモではなく、参加者数において高円寺の10分の1程度の芝公園での労組系デモだったという（五野井 2012：65）。

<sup>3</sup> 学生らのデモ、運動に対する負のイメージについて、五野井は「暴力に訴える学生デモ隊」vs「治安と秩序を維持する機動隊」の構図で描こうとしたメディア報道をその形成要因として挙げている（五野井 2012：99）。

<sup>4</sup> 1990年以降の日本のデモの性格にこの「祝祭性」を与えていった過程については、毛利嘉孝『ストリーートの思想』（NHKブックス、2009年）にも詳しく描かれている。